

魏晋南北朝から隋唐時代の官制の歴史的展開を、西洋史研究におけるいわゆる古代末期(Late Antiquity)の議論、とくにその多様性の表出という側面を念頭において西洋と中国それぞれの古代の比較を考えた場合、梁という時代はきわめて重要な時代である。だがしかし、梁代の官制に関する研究は、南朝という時代の固有性の一環としてなされることはあっても、唐代官制に与えた影響とそれ以降の歴史での位置づけという観点からの研究は、今なお乏しいように思われる。唐代以降に継承されなかった梁の諸制度はまぎれもなく「古代の多様性」の一つであったはずであり、梁代官制の独自性及びその再評価と、その後世との関係という視座を併せふまえた研究が必要である。かかる問題意識に基づき、本報告では南朝梁の武帝による將軍号の改革、とくに外国用の將軍号の新設を分析対象として、秦漢以来の伝統的官制の展開とそこからうかがわれる当時の天下観の変容について考察した。

第1節では將軍号改革の経緯と内容について、第2節では外国用將軍の運用について検討し、さらに第3節では外国用將軍を設定した理由について検討した。以上の分析をふまえ、中国の周辺諸国に対して南朝こそが中華の正朔の所在であることをアピールする必要があり、梁武帝は冊封の相手国に自国の將軍号が与えられていることを明示するために、外国用將軍号を新設したうえで諸外国に附与し、北魏の將軍号との差異化をはかったことを結論として提示した。外国用將軍号の新設に見られる「外」の設定は、従来の「王者無外」と称される中国独尊の礼制的価値観からの脱却の表象であり、南朝国家の自己の「相対化」、具体的には統一された天下であるはずの「中華」意識の変質と、従来とは異なる国家観の萌芽を表象する施策の一つとして、位置づけることができるのである。